

山下徳治における発生論の形成(1)

—成城小学校訓導時代を中心に—

前田 晶子〔鹿児島大学教育学部附属教育実践総合センター〕

Genetic Approach in Developmental Ideas of Yamashita Tokuji(1)

MAEDA Akiko

キーワード：山下徳治，発育論争，発達概念，成城小学校

はじめに

歴史研究においては、一定の評価が定着している事項であっても、新しい問題状況の中で再び問い直されるとき、定説とは異なる認識や構図が新たに浮上することがある。

現在、子どもの発達をめぐる、1970年代に障害児教育の中でみられたかつての論争を超えて、さまざまな領域で批判や新しい理解が登場してきている¹。発達観の思想性や政治性、社会・文化的規定性がこれらの指摘するところである。このような状況の中で、戦前の日本における発達をめぐる議論を再読してみると、当時は少数派とみられた立場が逆に新しい姿を顕してくるようと思われる。本研究の目的は、今日の発達論批判の動向に対して、その乗り越えの契機を歴史に探るものである。ここで取り上げるのは、1934年に「発育論争」を繰り広げた山下徳治である。

1 これまでの山下徳治研究

山下徳治（1892-1965）は、鹿児島師範学校を卒業後、西田小学校訓導時代を経て、小原国芳の導きで東京の成城小学校に赴任した。彼はこの上京を契機として、自由教育、プロレタリア教育、そして教育科学など戦前期の主な教育運動に参加し、中でも新興教育研究所の初代所長を務めたことで知られている。また、研究面では、ペスタロッチとデュイに傾倒し、独マールブルク大学留学中にナトルプ、ハイデガーに従事したほか、訪ソの際にはルナチャイスキー、パーソフ、ヴィゴツキーらとも交流をもった。他にも、小学校教員としてスタートした彼の教育学研究は、教材・教具の開発・研究として展開し、1934年に『教材と児

童学研究』が創刊された際には、誌の主催者として後述する「発育論争」を展開している。

山下徳治については、上記のような多様な経歴を反映して、新興教育の立役者として教育運動研究のなかで論じたもの²、「発育論争」と教育科学をめぐる発達思想の研究³、ペスタロッチ研究の観点やドイツ留学時代の山下を取りあげたもの⁴、さらに教育方法学の領域において彼の「社会研究科」構想を検討したもの⁵などの蓄積がある。これらの研究は、山下の研究や活動の意義と限界を、学説史として、あるいは史料論的に明らかにするものではあるが、概して1930年代までの、ある特定の一時点をあつかったものが主流であったといえる。しかし、アプローチの違いを超えてこれらを相互に関係づけていくには、山下の認識論をとらえる枠組みを検討する必要があると考える。これまでも、一貫した心理主義批判や人間学的立場といった山下独自の特徴が指摘されているが、やや一般的な表現に止まっている感が否めない⁶。

また、人間形成の科学を追求した山下のライフヒストリー研究もある⁷。しかし、その中では、戦後の山下が「(民間教育運動とは)別の道を歩んでいってしまった」ことに触れ、その背景に「戦前の辛い体験」があったかもしれないと指摘されている⁸。そのような見方もあつてか、戦後の山下を取り上げた研究は少なく、全体として人生の前半期に重点化されているのが現状である。しかし、山下と彼が身を置いた場に即して、さらなる検討が必要ではないかと考える。

そこで、本研究では、山下の発想の基底にあつて、生涯に渡ってその研究を方向づけてきたもの

は何か、という問いを立ててみたい。それは、単なる人物研究として山下に関心があるからではない。本論の冒頭でも述べたように、1934年の「発育論争」において、当時は劣勢であった山下の立場を、現時点から再検討したいと考えるからである。

2 「発育論争」における山下の立場

「発育論争」は、子どもの発達をどうとらえるかを巡って、日本で初めて起こった本格的な論争として、これまでも注目を集めてきた⁹。その核心は、児童は「発育するもの」(即自)か、それとも「発育されるもの」(対自)かという、研究対象としての児童のとらえ方の違いにあった。

山下は、論争の場となった雑誌『教材と児童学研究』の主催者として、創刊号巻頭論文「児童学とは何か」において、児童即自の立場を取り、「児童の自然性」を研究の中心に置くことが「新しい人間性」すなわち「人間の尊厳性や高貴性」を導き出し、「人類文化の発展」に寄与する広がりをもつものだと主張する¹⁰。

それに対して、城戸幡太郎、波多野完治、留岡清男といった心理学者が、誌上で後者の立場から批判を加えていくのである。例えば城戸は、子どもの「生活上の問題」にこそ注目すべきであるとして、子どもの発達へのアプローチは条件発生的な方法をとるべきであるとする¹¹。同様に波多野も「児童の環境的規定」を重視すべきであり、「発達」は発達そのものからではなくて、主体と環境との交渉の有様から規定されなければ真に説明された事にならない¹²とする。さらに留岡も、山下の「自然性」の議論には「ロマンティックなアニミズムがしのび込む危険性」があり、それに対して「児童がどう発達して行くかと云ふコンディション」を重視したのである¹³。

山下に対するこれらの批判の根底には、「子どもは大人の縮図ではない」という強い姿勢があった。城戸は、「自分が子供であつた其の時代を回想して子供とはどう云ふものかと云ふのではなく、…自分の中に自分ならざるものを子供に認め、かゝる自分の持つて居ないものを将来発展させると云ふことに対象を求める」¹⁴べきであるとする。

ところが山下の議論では、子どもの中に大人と同型のものを求めており、不変の発達像を自明とする立場には「生物学主義」や環境的要因を議論する余地のない「展開説」に陥る危険性が潜んでいるとするのである¹⁵。

ここで論点となるのは、果たして山下のいう「児童の自然性」の議論が、子どもの中に大人の縮図を見るという性格のものであったか否か、である。この点について、これまでの研究では、子どもの「人間的な自然」の中に人間のもつ尊厳性や高貴性を追求するという山下の発想について、他の論者とは「発達の課題の解決の方向性が異なる」のであり、そこには「小学校教員出身の山下」のこだわりが影響しているという評価¹⁶や、生活綴方にみられる「子どもの中に問題を発見する」という方法との類似性を指摘するもの¹⁷がある。すなわち、山下の場合、子どものつかみ方が教師の実践的発想を反映したものであるとされているのである。

山下が教材・教具に関心を持っていたことを踏まえれば、このような総括も可能だが、この論争の対立点やずれを明確にする上では十分であるとはいえない。例えば、後者についていえば、生活綴方が子どもの表現物から直接に彼らの生活課題を拾い上げるという方法をとるのに対し、山下のいう現象学的方法は、子どもの自然性の中に人間の高貴性や尊厳性を求めるのではなく、人類史の原動力をみるという歴史的な媒介性をもつ発想であったと考えることはできないだろうか。このようにとらえると、単に山下において実践志向が強かったということで、この論争をまとめることはできないと考える。

そこで、本研究では、山下の生涯を貫いてその軌跡を理解しうる指標、また同時に「発育論争」における彼の志向性を明確にしうる視点を探りたい。この点についての本論における仮説は、それが山下の「発育論争のアプローチ」とでもいえるものであったのではないかと考えるのである。

先行研究を俯瞰してみると、山下独自の教育学の特徴として注目されるのは、彼が子どもや教育を一貫して「発育論」的な観点からとらえようとしていた点である。例として、先行研究の中で「発

生論」に言及した箇所を挙げてみると、以下のようになる。

山下は、思想・道徳・芸術は「ただそれらが創造的であるという以上に、人間性や世界人類性に通ずる人間の根源的な意味をもって」¹⁷と考える。そういう人間の自己形成が法則性をもつものとするれば、それは人類発生¹⁸の初源から、その進化のあらゆる発展段階を通じて、共通の想像力をもつものと考えざるを得ない。それを山下は、人間の生命力そのものに求めて、＜人間性の根源力である＞ものとしての《衝動性》に、思いを深めていった¹⁸。

児童の実験的研究は成城小学校の特色の一つであったが、山下は「個体発達史は系統発達史を繰り返す」という見解に媒介されながら、「児童研究を發生的に又実験的に研究せんとするものにとって人類の文化発達史の研究は同時にそれがなされなければならぬ」と述べ、子ども研究と人類文化発達史の研究を結合することを提起したのである¹⁹。

山下は、公的カリキュラムの「学科自體の論理的要求」を原理とする教材選択上の問題点や、当時の生活教育の諸実践が依拠する「心理的要求」を原理とする論理の問題点を打開し、これらの原理を統合する新たな原理を「發生的見解」に求めた。すなわち、「児童の生活の欲求」という個体発達史を追うことで、「人類の生活の欲求」という系統発達史を繰り返そうとする方法である²⁰。

以上のような指摘から、山下が早い段階からベスタロッちに傾倒していたこともあって、彼の教育学研究の基底に発生論的発想が色濃くあったことは明らかではないだろうか。しかし、その発想がどのように形成され、いかなる性格をもつのか、という点については十分研究されてきたとはいえない。また、「發育論争」をこの観点から分析する仕事も未着手である。以下では、このアプローチを手がかりとして、山下の生涯にわたる思索の

跡をたどりなおしてみたい。今回は、鹿児島で出生してから東京の成城小学校で教鞭をとるまでの若き日の山下の教育・研究活動を対象とし、発生論的発想の形成過程を追ってみたいと考える。

3 鹿児島時代の山下徳治

鹿児島時代の山下については、彼自身による回顧録²¹に頼らざるを得ない。戦火に焼かれた鹿児島では、各学校に残された史料は多くはなく、山下の在学中の状況を探ることは難しい。また、鹿児島教育会発行の『鹿児島教育』をみても、彼につながる情報は僅少である²²。限られた史料ではあるが、以下では、末尾に添付した＜山下徳治年譜＞を参照しながら、鹿児島時代の山下のライフヒストリーにおける発生論的志向の形成について見ていきたい。

山下は、父親が砂糖の製造・販売業に従事していた徳之島で1892年に出生している。徳之島の製糖業は、1873年に自由取引が開始されて以降もなお、行政とつながりのある大島商社の独占販売状況が続いていた。その後、1885年に島民主体の「阿部組」、1887年に鹿児島の商業界が起こした「南島興産商社」が設立され、両者の間の抗争が展開する。このような政治的混乱の下で産業自体は厳しい状況に置かれるのだが、山下が生まれた頃には、再び制度面での安定と、それに伴う生産量、品質の改善がみられたという²³。山下の父の徳之島での立場や、鹿児島市に戻る経緯などは不明だが、後に彼の長兄と次女が台湾に渡っていることなどを併せて考えると、山下家の家族経営は奄美群島から琉球、さらに植民地化される台湾などを含め、海洋を舞台として展開したものであったと考えることができる。

この点は、のちに西田小学校を辞し、豪メルボルン大学にて海洋学を学ぶ夢をもって鹿児島を離れた際の彼の心境にも連なっている。彼は、「海国日本の教育を、大洋学研究の礎石の上に建設したい野心からの志望」であったと語り、60代になっても「海」へのあこがれを「海洋で白帆を操縦しながら青少年たちと生活してみたいという夢」として語っている²⁴。

3歳で鹿児島市西田町に戻った山下は、6歳か

ら郷中教育として自彊学舎で学ぶようになる。この健児の舎に、山下は親しみを持って通い続けたようである。彼が教員とのトラブルから鹿兒島第一中学校を2年で中退となり、師範学校への転入を志した際にも、この学舎で勉学に励んだとされている²⁵。

その後、師範学校の4年間を経て教師生活をスタートさせたのは、母校西田小学校であった。1887年に創立されたこの学校は、かつて西郷隆盛の屋敷が近くにあり、前身となる「武小学」の札を西郷が揮毫したものが残されている。また、税所教子や小松帯刀、八田知紀などを輩出しており、市内でも歴史の古い学校の一つである。山下は、この学校で4年間の訓導生活を送ったのち、台湾へ向け鹿兒島を離れている。

この時期のエピソードとして興味深いのは、教師2年目の年の修学旅行である。山下は、六年生の修学旅行を独自に企画し、生徒には前年度から費用の積み立てを行わせた。その行程は、「鹿兒島市から重富まで汽車に乗り、八里の路を入来温泉場へ向かい、川内川の轟滝に到り、そこから川内市まで舟で河下りして、串木野、伊集院を経て帰校する」というもので、過酷な旅程に校長からは中止の要請もあったということである。この旅を強行した山下は、当時を振り返って、「子供たちは、自分のからだ、自分の体力について、ほつとしながら自信を得た」²⁶と語っている。校長を説得し、担任である自分の要求を実行したことが結果として子どもの人間形成に大きな影響を与えることとなり、人間としての信念が「真実なる幸福」をもたらしたと語っている。山下は、当時の彼自身の態度を「自然に帰れ」（「人間が持つて生れた天賦の能力を、最大限度に発揮」するための道）の思想であると評し、この姿勢は生涯を通して一貫し、またより強まっているとしている。これらの言葉が自伝的文章であることを考慮しなければならないが、人間形成における身体や体育への関心は、戦後の執筆活動において中心的なテーマとなるものであり、興味深い²⁷。この山下の身体論が、どのように発生論につながるのか、教育論の展開に即して検討する必要がある。

西田小学校から台湾に渡った山下は、阿綴小学

校に勤務しながら、熱帯植物の研究者である松田英二とともに、クワルスやカピアンに植物採集に出かけている。その折の情景を次のように綴っている。

平地で文明人たちが熱帯の灼熱した陽光に喘いでいるとき、蕃人たちは三千尺の高原で涼風に長髪を靡かせながら、そして歌をうたいながら仕事にいそしんでいる。原始人たちの幸福な生活が、彼らの高い道徳律によつて、一層その真価を発揮している美しい情景に接して、私は、文明とは何ぞやと事毎に問わざるを得なかつた²⁸。

のちに登場する山下の「人間的自然」論においては、文化的に未発達な民族と子どもは同じレベルに置かれると指摘されているが²⁹、彼の子どもにとらえ方の原風景として、台湾での経験が影響を与えたのかもしれない。

4 成城小学校と初期の論考

結局のところ、山下の豪州行きは、当地の排日運動の影響で断念しなければならなかったようである。その後、1920年に小原国芳の誘いで東京・成城小学校に赴任する。ここで彼は、成城小学校での教育の他に、機関誌『教育問題研究』の編集を任されることになった。また、仕事以外では、内村鑑三の聖書講義を聴き、ドイツ語専門学校にも通っている。

この時期の発表されたもの、すなわち『教育問題研究』にみられる諸論文は、山下の初期の論考としていくつかの特徴を持っている。

ドイツ留学（1923年）以前の論考で目をひくのは、山下が「人間性」を純粋な形で追求しようとしていた点である。例えば、「行為の本質的理解から生まれる行為は無意識の状態である」³⁰という指摘や、「子供の柔和にして純真なる無邪気さ」³¹といった表現にみられるように、知識や哲学以前の状況への着目がみられる。人間の本质を純化してとらえようとする志向性は、この時期どの論文にも顕著に読み取ることができる。

また同時に、複数の論文に登場するフレーズで

あるが、子どもと原始人のアナロジー的把握が散見される。山下は、「原始人の生活それが子供の生活である」と位置づけ、「児童研究を發生的に又実験的に研究せんとするものにとつて人類の文化発達史の研究は同時にそれがなされなければならぬ」³²と述べている。また、人間の諸器官のうちもっとも最初に発達する「聴覚」を扱う領域として、成城小学校の国語科に「聴方科」を特設したことに触れ、特筆に値すると述べている。このように、彼の議論には、人類史的、進化論的な子ども観が容易に発見できるのである。

以下では、山下が子どもの中に見た純粋な人間性について、その具体的表現を見てみよう。子どもの詩をあつかった文章では、山下は「詩は哲学以前のもの、道徳以前のもの、宗教以前のもの」としており、さらに「人類は総て詩人として生れた」という表現さしている³³。また、「子供の自然的発育に於いては隣人や人類への友愛が最も美しい方法で表現されるのが当然の行路である」³⁴として、子どもの作品を掲載している。その中の一つを引用してみよう。

天国

青い野原に／きれいな花が咲いて／鳥がいい声で／歌つてる／エルゼン達^アが／面白く／遊んでゐる／僕も一緒に遊びたい。／天国に行くには／つよくえらく／ならねばならぬ。／行く道には／死のかげの谷や／大きな川があるのだもの³⁵。

ここに表現されている子どもの喜びや希望が、「純粋にして永遠の実在なる人間の魂」の発展につながるものとして紹介されているのである。

また、師範学校を卒業後10年目にして初めて担当をした尋常科1年生について論じたものなかなには、上記で述べてきた諸点がより具体的に現れている。

原始的自然的生活、ロビンソククルソーの生活、手と足 頭とを一致せしめて自由に使へる生活、体育と知育と徳育とのバランスを失はない生活、それが尋一の教育に於て

深く心しなければならぬことであると思つた³⁶。

面白いのは、入学前に保護者に彼が送った通知文の一節である。

個人的家庭的生活から学校生活に移るからと言つて何も特別な作法上の準備などは必要だと思ひます。唯純にさへ育つて居ればそれが何よりの重大な、無くてならぬ最大の準備かと思つてゐます。子供のあるがまゝの作法が、躰が一番望ましいことです。たゞ自分の名前が「カナ」で読めること。

ボタン掛の練習

便所行の練習等が少しあれば十分です³⁷。

教育熱心な成城小学校の保護者にこのような教師の要望がどのように映つたか。いずれにせよ、山下の理想論は、成城という代表的な新学校においても、実践の場面ではその純化の程度は弱まらざるをえなかつたのではないか。それが前段と最後の数行の落差にかいま見ることができよう。

さて、成城小学校では、山下は算数教育に力を入れるのであるが、それは「数学こそは完全なる思想の表現」であり、「其処に全人格の世界があり必然と自由の世界が発見される」³⁸からであるとされる。

永遠の法則を離れ、信仰を離れては $5 + 4 = 9$ も独断である。或は習慣的伝統的模倣的、の機械的産出に過ぎない。其処には創造もなければ産出もない。子供にとつては $5 + 4 = 9$ の発見は独創であり。信仰であり。法悦である。恐らく子供の知識の中でそれ程確実なものが他にあらうか³⁹。

しかし、実際の数学教育は功利主義的な立場から、計算への習熟に主眼が置かれていると山下は批判する。そして、子どもをして純粋数学としての「永遠の法則」を得させるためには、「直観」によって数概念をとらえさせること以外にはないとする。このように、数概念の発生過程を直観に

よって子どもにたどらせることを提起するところは、先に触れた人類史的発想と一致する。

ところで、成城小学校時代の山下は、内村鑑三の聖書講義を聴くなど、キリスト教の影響下にあった。この頃の文章に、神や宗教への言及が頻繁にみられる。数学教育についても同様で、直感的把握の背後には、神の存在が想定されていることは先の引用からも読み取れるだろう。

重要なのは、山下は、「直観」という人間の純粹な自然性は、それを絶対化するのではなく、むしろ反省につなげていく必要があると述べる点である。言い換えると、自然性をそのままではとすのではなく、反省の上に純化されることが要求されるのである。すなわち、子どもへの「愛」は、「理性」をもって「合理化」されなければ「純粹」に到らないということである⁴⁰。

哲学的思索と道徳的行為とを内面的に結合する宗教的立場が反省の頂点を示す⁴¹

知識が知識を反省するのである。直観が直観を反省するのである。そこには知識以上のものを要する。私は再び哲学から宗教へ帰らねばならぬ⁴²。

以上から、山下の発生論的アプローチは、子どもの成長を人類史に位置づけつつ、その直観を反省によって純化し、人間の自然性を発展させていくこと、そしてその支えとして宗教が位置づけられるという構図としてみえてきた。

先にも取り上げた子どもの詩についても、「ファンタシカルな子供」という表現を用いて単なる無邪気さを賛美しているのではなく、「真に子供の想像は時空を超えて宇宙の無限性に触れたアプリアリのアプリアリ」⁴³、すなわち子どもの奔放さの背後にある宗教的な起源を問題としているのである。

初期の山下の論考では、宗教的表現を通して、発生論への志向が表現されていることを見てきた。それは、決定論的発想ではなく、むしろ歴史を乗り越え、人類の未来を子どもの教育を通して志すものである。それは、「体験」について論じ

た次の文にも明確に表明されているのである。

経験を体験化するものは反省である。経験に発達があつても体験に見らるべき進化はない。既に能力の発現があつても生命の無限的発現はない。

進化—無限の希望⁴⁴

本研究は、文部科学省科学研究費補助金若手研究(B) (課題番号：20730509「近代日本の教育学と発達概念の展開」) の研究成果の一部である。

¹心理学内部でのさまざまな動きは1990年代から顕著であったが、近年は、田中智志他『キーワード現代の教育学』(東京大学出版会, 2009年)、矢野智司『贈与と交換の教育学』(東京大学出版会, 2008年)など、ポストモダニズムにおける議論の展開が注目されている。このような状況下において、かつての『反発達論』(山下恒男, 1977年)もまた2002年に再版されている。

²例えば、井野川潔「山下徳治と新興教育」『近代日本の教育を育てた人々』(東洋館出版社, 1965年)。

³内島貞雄, 「発達と教育に関する史料紹介」(『民間教育史料研究』第11号, 1975年7月)及び「山下徳治の子ども認識と教育研究」(『教育運動研究』創刊号, 1976年7月)、高橋智・清水寛『城戸幡太郎と日本の障害児教育科学』(多賀出版, 1998年)、中内敏夫『中内敏夫著作集VI 学校改造論争の深層』(藤原書店, 1999年)、大泉溥「近代日本における教育心理学と「輸入科学」問題」(『心理科学』第4巻第1号, 1980年9月。)、前田晶子「近代日本の発達概念における身体論の検討」(『鹿兒島大学教育学部研究紀要』教育科学編, 第59巻, 2008年)など。

⁴寺岡聖豪「山下徳治とペスタロッチー」(浜田栄夫編『ペスタロッチー・フレーベルと日本の近代教育』玉川大学出版部, 2009年)、宮崎俊明「山下徳治にみるドイツ教育学の受容問題」(『鹿兒島大学教育学部研究紀要』教育科学編, 第51巻, 2000年)など。

⁵谷口和也「社会科成立以前にみられる社会科的カリキュラム」(『岩手大学教育学部研究年報』第57巻第2号, 1998年2月)など。

⁶内島貞雄, 前掲「山下徳治の子ども認識と教育研究」pp.74-77。

⁷海老原治善「解説 山下徳治とその教育学」『明日の学校』(明治図書出版, 1973年), 井野川潔, 前掲「山下徳治と新興教育」。また, 宮崎俊明, 前掲「山下徳治にみるドイツ教育学の受容問題」にも, その生育史について詳しい情報がある。なお, <年譜>はこれらの資料をもとに作成した。

⁸海老原治善, 前掲「解説 山下徳治とその教育学」p.259。

⁹「発育論争」という表現は, その後の研究の中で共有されているものと考えが, 筆者は, この議論が「発達」をどのようにとらえるかという現代の課題にもつながるものとして位置づけ, 「発達論争」と言い換えてもよいのではないかと考えている。

¹⁰村上純(山下のペンネーム)「児童学とは何か」『教材と児童学研究』創刊号, 1934年5月。

¹¹「『児童学とは何か』の座談会」『教材と児童学研究』第1巻第2号, 1934年6月。

¹²波多野完治「児童学に就いて」『教材と児童学研究』第1巻第3号, 1934年7月。

¹³留岡清男他「発育に就いて」の座談会『教材と児童学研究』第1巻第4号, 1934年8月。

¹⁴前掲「『児童学とは何か』の座談会」。

¹⁵西川好夫「『児童学とは何か』に関する討議を読み」『教材と児童学研究』第1巻第4号。

¹⁶高橋智・清水寛, 前掲『城戸幡太郎と日本の障害児教育科学』p.47。

¹⁷内島貞雄, 前掲「山下徳治の子ども認識と教育研究」。ここでは, 類似性だけでなく, 結局は山下が生活教育論争における教育科学研究会の立場に接近することにも言及されている。

¹⁸井野川潔, 前掲「山下徳治と新興教育」。

¹⁹内島貞雄, 前掲「山下徳治の子ども認識と教育研究」。

²⁰谷口和也, 前掲「社会科成立以前にみられる社会科的カリキュラム」。

²¹山下徳治「ころび行く石」『自伝的教師像』(人

の教育, 第10号)松本浩記編, 1956年。

²²例えば, 1910年から1917年まで鹿児島県女子師範学校と鹿児島県立第二高等女学校の校長を兼任し, 山下にも新教育の影響を与えたと思われる木下竹二の論考や彼の県教育会での活動が伺えるほか, 後に成城小学校で出会う沢柳政太郎の「時局と教育」(『鹿児島教育』第254号, 1914年12月)などがある程度である。

²³『徳之島町誌』1970年, pp.315-334。

²⁴山下徳治, 前掲「ころび行く石」p.39

²⁵山下徳治, 前掲「ころび行く石」p.32。

²⁶山下徳治, 前掲「ころび行く石」p.37。

²⁷ちなみに, 木下竹二も女子師範・第二高女において, 鍛錬を目的とした長距離遠足を実施している。現在も続くこの伝統が, 新教育の系譜から生まれてきていることは興味深い。鹿児島県女子師範学校・鹿児島県立第二高等女学校・鹿児島県女師附属小学校『創立二十周年記念誌』1930年。

²⁸山下徳治, 前掲「ころび行く石」p.40。

²⁹内島, 前掲「発達と教育に関する史料紹介」p.7。

³⁰山下徳治「反省の概念について」『教育問題研究』第17号, 1921年8月, p.25。

³¹山下徳治「子供の理解」『教育問題研究』第13号, 1922年4月, p.15。

³²山下徳治「藤井君の聴方実地授業」『教育問題研究』第29号, 1922年8月, p.92。

³³山下徳治「ふたたび子供の詩について」『教育問題研究』第号, 1923年1月, pp.45-46。

³⁴山下徳治, 前掲「ふたたび子供の詩について」p.17。

³⁵山下徳治, 前掲「ふたたび子供の詩について」p.59。

³⁶山下徳治「尋一経営の九ヶ月(一)」『教育問題研究』第号, 1923年2月, p.6。

³⁷山下徳治「尋一経営の九ヶ月(一)」p.8。

³⁸山下徳治「低学年の数学教授に於ける諸問題」『教育問題研究』第号, 1922年3月, pp.58-59。

³⁹山下徳治, 前掲「低学年の数学教授に於ける諸問題」p.58。

⁴⁰山下徳治, 前掲「反省の概念について」p.29。

⁴¹山下徳治, 前掲「反省の概念について」p.30。

⁴²山下徳治, 前掲「低学年の数学教授に於ける諸

問題」 p.63。

⁴³山下徳治, 前掲「子供の理解」 p.16。

⁴⁴山下徳治, 前掲「反省の概念について」 p.29。

山下徳治年譜

年	年齢	事	項	出 版
1892	明治25	0	1月25日鹿児島県徳之島に出生 (4男6女の3男, 第六子)。父は, 西南戦争後, 砂糖製造・販売業に従事。	
1895	明治28	3	鹿児島市西田町に転居	
1898	明治31	6	健児の舎「自彊学舎」に通い始める	
1902	明治35	7	西田小学校卒業	
1905	明治38	13	母の逝去	
1906	明治39	14	鹿児島高等小学校卒業	
1907	明治40	15	鹿児島第一中学校 (教師との対立で2年3学期に退学)	
1909	明治42	17	鹿児島師範学校 (本科第一部) に転入	教頭追放運動への参加。キリスト教との関わり。
1913	大正2	21	師範学校卒業, 西田小学校訓導となる	
1916	大正5	24	小原国芳の哲学講演会 (清水小学校) に参加	
1918	大正7	26	海洋学を学ぶため, メルボルン大学を目指してひとまず長兄と次女の住む台湾へ。松田英治 (植物学者) の紹介で阿緞小学校に勤務。	ベスタロッチとの出会い。
1920	大正9	28	小原の招きで成城小学校に赴任。算数教育に取り組む。ドイツ語専修学校に通う。	無教会派の日曜学校に参加。内村鑑三の聖書講義に出席。
1923	大正12	31	第1回海外派遣生として渡独訪ソ	ナトルプ, ハイデガーに従事。三木清 (1922-24) と交流。
1927	昭和2	35	成城学園高等部ドイツ語教師, 小学部主任 12月沢柳政太郎が逝去	
1928	昭和3	36	自由学園に転任 11月訪ソ (1ヶ月半)	ルナチャルスキー, パソフ, ヴィゴツキー, ボルンスキーらを訪問, 単一労働学校のシャッキーと出会いダルトンプランについて議論した。
1929	昭和4	37	プロレタリア科学研究所教育問題研究会の責任者	『新興ロシアの教育』
1930	昭和5	38	新興教育研究所設立, 初代所長に就任 朝鮮新教支部準備会の弾圧に伴い京城へ連行 (2審で無罪)	『新興教育』創刊
1932	昭和7	40		『教化史』 (『日本資本主義発達史講座』第二部)
1933	昭和8	41	『教育』編集部	
1934	昭和9	42	児童学研究会	『教材と児童学研究』創刊, 『教師日記』
1936	昭和11	44		『ギイヨオ・デュエイ』
1937	昭和12	45	教育科学研究会の結成に参画	
1938	昭和13	46		『児童教育基礎理論』
1939	昭和14	47		『明日の学校』
1941	昭和16	49	結婚して「森」姓となる	
1943	昭和18	51		『子供のからだ』 『労務者の職分』
1944	昭和19	52	教科研事件で検挙	
1948	昭和23	56		『デュエイの哲学と教育』
1949	昭和24	57		『ジョン・デュエイ学説批判』 『経験哲学入門』
1950	昭和25	58		『ベスタロッチからデュエイへ』
1951	昭和26	59		『技術の生いたち』
1952	昭和27	60		『すまいのおいたち』
1965	昭和40	73	逝去	